東京日日新聞

北支事変

滿ソ国境黑龍江島嶼問題を続る砲声の余韻未だ消へざるに北平郊外蘆溝橋の夜半に支那兵発射の不法の銃声併して北支事変の火蓋を切るに至り、七日夜来我軍の應戦、支那軍の集結、南京政府直系軍の北上と北支の野に戦雲低迷、日支間緊張市吉を繞づかはれる情勢を展開するに至つた。

事件勃発の直接原因は七日夜北支在留臣民の生命財産保護の便命に当る北支駐屯軍が從来より慣行せる夜間演習を実施し居る際此を不当なりとして冀察政権の大立物宋哲元配下の第廿九軍が蘆溝橋に於て日軍に対して発砲したに始まるのであるが、この事件は去る十一日北支駐屯軍と冀察政権の間に日本軍及び第廿九路軍の撤退、責任者の処罰に関する交渉成立、事件の解決を見んとしてゐたのである。

尚去る六月中に北支に対して野砲七一、機関銃二五〇、小銃二六三〇包み、小銃弾四七七〇〇箱、砲弾一六五〇箱、鉄条網用針金積載自動車九十台、セメント樽八〇〇、小麦粉八二七〇〇袋、米二一三〇〇〇袋、衣類積載自動車二三〇台、其他軍用自動車、自轉車、塹壕構築用品等を送り（ユナイテッド社十四日東京通信による）爾以て抗日行為を計画して居た南京政府は其の交渉を訣めず、十三日北平通信によれば冀察政権に対し積極的攻勢を命ずると同時に、河北、山西、河南、河北、安徽、江蘇各省駐屯の中央直系軍に対し動員令を下し天津を中心とし龍海、平漢両沿線に集結を命じ、更に山東省の韓復榘にも作戦命令を発するに至り、遂に明かに蔣介石の大々的抗日戦は既に開始されたと見るより外なき情勢となつたのである。

以上日本軍に対する南京政府の態度であるが、かくて蔣介石が抗日戦を敢行せんとする裏には、北支の自治を目標とせる冀察政権の蘆溝橋衛軍第廿九路軍及び北支の雑軍を抗日第一戦線に立て、日本軍の手によりて此の勢力を消滅せしめ地方政権としての独立体制を有する冀察政権を解消せしめ、一方日本に優柔なる南京政府の採配下に置かんとする南京政府の採配下に置かんとするのであり、其の結果北平は取扱はれる訳となるのである。

此の間の消息を熟知する為には冀察政権の由来を知らなければならない。

元来冀察政権の冀ふる文字は河北省を指して言ふのであり、其の東部に於て強力自治政府を樹立してゐるが冀東政権であり、其の河北省の東部と察即ち察哈尔省とは殷ゲツ政治を行つてゐるのが冀察政権であつて、この二政権は一九三五年河北省香河県農民が、(一)国民政府の売国政策を計画し、(二)赤化防止、(三)租税の軽減を旗印として国民政府より独立自治の宣言をなしたのを発端に、国民政府の苛斂誅求に苦しんだ北支農民が峰起し、我が天津軍と河北省政府の斡旋によりて一時鎮静したが、此が契機となりて北支全体の自治運動即ち北支を日満支間の特殊地帯として南京政府の直接覊束より脱離する運動が起り、宋哲元を盟主として山東の韓復榘、山西の閻錫山綏遠の傅作義を一丸としたオール北支将領の自治運動に轉化せんとしたのである。

此の形勢に狼狽した南京政府は或は参謀次長の熊斌を北上せしめて懐柔工作を行ひ、馮玉祥を南京に優待して北支将領の切崩しを行ひ、又北支の外廓に中央軍を集注するなど百方北支自治政権の樹立されるを防害した。其の結果北平に樹立されたのが冀察政府委員会即ち冀察政権で、北支人の為の北支を要望し乍ら南京政府の命令に服すると云ふが如き曖昧矛盾した妥協的存在を敢て示してゐるのであつて、南京政府としては甚だ邪魔になる地方政権なのである。此を此の機会に一掃整理してしまわうと云ふので、先づ冀察政権を中心とする武力を抗日戦線の正面に押し立て日本軍北支軍の両方を戦闘状態に陥め援軍として中央軍を次々と送り両軍の弱つた処で中央軍を以て北支を固め様と云ふ一挙両得の政策が南京政府によつて遂行されてゐるわけなのである。

以上我が方が冀察政権との交渉に依つて局地問題として処理しようと云ふ即ち不拡大の方針に対して何が故に南京政府が各省の中央直系軍を動員して大々的抗日戦線を張るに至つたか、其の支那の内面的事情が明かにされたと思ふ、而して日本としては数限りなき外交交渉をかさね、恬として改めざる支那側の侮日、排日の行為を膺懲する意味に於て、又在留邦人の生命財産保護、国民の威信の保持の上から云つても武力の行使は止むを得ざる処であり、況して日本各世界国家の経済組織を破壊せんとする共産イデオロギーが外蒙を越へて支那に浸透、正に滿洲、日本に押し寄せんとしつゝある現状にある事を考へれば、国家存続の上から云つても之に対して強力なる防止工作を実施する必要があるのであつて此の際支那に侵入しつゝある赤化勢力を排除し禍根を一掃するに非ざれば東洋諸国家を赤化の魔手より救ふ事は出来ないのである。斯る思想上の正当防衛の上から云つても日本としては北支に政権の首班が何人なるかを問はず、建全なるイデオロギーに基く善政が布かれる事が必要であり、又北支自体としても資源の有効能率的開発、健全なる経済活動の遂行の為には赤化防止の必要があるのであつて既に此の事を痛感した日本は昨年独ソとの間に防共協定を結ぶに至つた程、ソ聯側の赤化工作は東亜に於て発展してゐるのである。

斯く我方の強硬態度の出る処を考へれば自衛に基ずく正当行為ふのであつて、在苟打捨て置かんか、共産イデオロギーの蔓延、徒東を攪乱せんとする赤化の魔手は果して赤辺に達するや予測を許さず、早晩東洋諸国は赤色の桎梏下に呻吟するに至るの情勢を展開せんとを計り難いのである。

斯る時、東洋の安寧の為には果経済社会機構を破壊せんとする共産思想駆逐の為に本を取つて立つ我軍の行動に対して日本インペリアリズムの名を恣し侵略的行動の顕現と見るが如き徒輩があるが、其に対して蒙を開くは帝国臣民の動めとすべき所であるのであつて、我等今、茲に心し、とゞすれば北支事変の真相が外字紙によつて歪曲して傳へられんとする今日、謬れる認識を是正すべく努力すべきである。

北支事変に関しては

第三国の喙入を許さず

英国の出方に対する我が見解

（東京十六日）北支事変に関し英国の態度は種々周へられるが、我外務当局は今後に於ける英国の出方に関し左の如き見解と万全不動の対策を堅持してゐる、

一、英国は今不事件発生の原因は全く支那側にありとの正しき認識を把握してゐる様であるから英国が本問題の解決に乗出すとしても先づ日本側の意向を充分諒めたる上、その意向を体して支那側に対し勧告を示し我国に対しては干渉がましき態度に出る事ふきとのと認める、

一、若し仮に英国が単独に或は米仏を誘ひ干渉がましき態度に出る事あり

とすれば上海事件等に於ける従来の例に鑑み我国伝統的外交方針たる第三国の喙入を許さざるの建前に従ひ日支両国の問題は両国のみの交渉に依り解決を期するとの方針を堅持して干渉を拒否する、

青島を支配する強硬論

日本と戦争を交へる決意

（青島十六日）軍政部長何應欽は青島特別市長沈鴻烈に対し対日抗戦に関する中央の意図を通達した同市長は直に緊急首脳部会議を開き対策を密議したが強硬論が大勢を支配し、鎮和艦隊の保安隊約二千と元来北海軍であつた第三艦隊を率ゐ中央派遣の税警團と協力して青島防備に当り場合によりては日本軍と一戦を交へる決意を固め既に高級幹部に密令を発したと傳へられる、

安平で日支軍衝突！

（天津十六日）軍司令部に達した報告によれば十六日午前八時過ぎ日本軍〇〇部隊、安平（通州の東南約三十キロ）に入らんとするや突如支那保安隊より射撃を受け更に合図と共に約百名の支那軍が出現し村の周囲の城壁に展開し我が部隊を射撃した、我軍は直ちに応戦、約百名の支那人を武装解除した、我軍の損害に就ては未だ詳報がない、

支那側は我方の要求を約諾し更に積極的誠意を表示してゐるに不拘、斯くの如き我軍攻撃が依然として行はれ事態の平和的收拾は益々困難視されるに至つた

支那軍戦線を鋭意増強

（十五日陸軍省発表）一、諸情報を綜合するに支那側は永定河左岸に於ける兵力を撤退せざるのみか、却つて兵力を増大し工事を増強しつゝある状況にある、即ち北平西南側平漢線に沿ふ線を第一線とし、その後方に数線の工事を実施してゐる、永定河右岸長辛店附近に於ける工事は鋭意増強されてゐる、二、平漢線を北上中の支那軍は多くは夜間急行に依り北送されてゐるが十四日平漢線上にあるとの四、五十列車を下らぬ模様である、（十六日午後陸軍省発表）北支方面へ移動中の支那軍は主力を以て平漢線に沿ふ地区に、一部を以て津浦線及び平綏線に沿ふ地区を前進中の如く十五日迄に滄海線以北山西省以東の地区に集注せる兵力は平時兵力と合し既に約廿師に達した

中央軍航空機十八台

蘆溝橋戦線に参加

（上海十五日）中央は廿九軍の愛蘭を客ふ中央軍航空隊七隊（十八機）を鄭州より保定に輸送、廿七師の警備を届出しめ蘆溝橋戦線に参加せしめる事に成り右飛行隊は若干の軍用機と偵察機を以て編成され主として日本軍の偵察に当るべしと

中央軍第二期作戦準備に移る

（上海十五日）支那側確報によれば中央軍は今十五日を期し第二期作戦準備に移り今迄動員令を下した者の外安徽河南両省に駐屯の特科隊に対し動員開始を命じた、

大平の支那人我軍へ献金

（十五日陸軍省発表）北平在住の支那人は廿九軍の市内駐在を嫌悪してその市外撤退を懇望しつゝあるが十五日一支那人はわが駐屯軍を訪問し銀百元を出し我が将士等の慰問に資せられたき旨を申出た

川越大使の動静

（東京十六日）広田外相は十六日目下天津に滞在中の川越駐支大使に対し急遽南京へ帰還すべき旨の訓令を発した、川越大使は陸軍外務両出先官憲と懇重打合せを遂げたので遅かに南京へ帰還の上、王外交部長、其の他要人と会見し、南京政府に於て、天津に於て行はれつゝある現地交渉を進捗せしめ其の実行を確約して事態の急迫する收拾に努力すべき旨申入れる筈で、現地折衝と平行して南京に於ても近く日支間の交渉が展開される事になつた、

北支事変の死傷者

（十六日陸軍省発表）七月十二日迄に於ける我軍死傷者左の如し、

戦死　准士官五、兵十二、計十七、

戦傷　将校七、准尉下士官五、兵廿八、計四十

邦人の引揚げ

（北平十六日）我北平大使館では張家口方面の邦人約五百名引揚の為平綏線当局に対し引揚列車差立方交渉中で、両日中に平津に引揚終るの見込み、山西省大原の邦人は十六日朝引揚終る、北平より奥地の邦人も軍関係者を除く全部は引揚ずみ。

南京政府との外交折衝 遺憾ながら全く絶望

廣田外相、枢府側に説明

（東京十四日）政府は今回の北支事件の重大性に鑑み枢府側に対しても事変の原因経過並に帝国政府の是に対應する方針に関し報告し諒解を求めると共に挙国支援を求めるため、十四日宮中に於ける定例本会議終了後特に平沼、荒井正副議長以下各顧問官全部の居残りを求め、政府側より廣田外相、杉山陸相、米内海相、賀屋蔵相の四閣僚出席、北支の地図を案じ先づ杉山陸相より今回北支事変の直接原因たる蘆溝橋事件以来今日に至るまでの経過、現地の状況、帝国政府の重大声明と断乎派兵を決意するに至つた事情等について詳細説明し、帝国政府としては東亜平和の維持については常に飽迄するところであり

今後も局面不拡大の方針で臨み支那側の速かなる反省を求める方針である旨を述べ、次で廣田外相より南京政府との外交的折衝の経過並に英米蘇国に対し事変の真相を説明諒解を求めつゝある経過につき報告し、南京政府に対する外交折衝について現在に於ては遺憾ながら全く絶望の外ない、尚諸外国は大体我国の真意を諒解してゐる様であると述べ、更に賀屋蔵相から北支事変と財政との関係を述べて諒解を求め各顧問官の間に二三の質疑應答あつた後金子元田、石井等各顧問官より時局は頗る重大である、勿論不拡大方針で進む事は希望する所であるが帝国としては此際根本的解決を計り、東亜永遠の平和を確立するため断乎たる決意を以て臨れ度いと激励意見を開陳、政府の處置を全面的に諒承し零時四十五分散会した、散会後杉山陸相は平沼、荒井正副議長と会見、重要協議するところあつた、

北支事変を続る祖国の情勢

三宅阪に殺到する激励鼓舞 挙國一致支援の決議文

（東京十四日）相次ぐ恤兵金や国防献金に伴ひ北支事変の発生以来三宅阪には激励鼓舞、挙国一致支援の決議電報、手紙さては血書が殺到し国を挙げての憂国の熱誠当局者を感激せしめてゐる、十四日正午までに陸軍大臣或は陸軍省に到着した電報は二千通、高雄市民大会、和歌山聯隊分会、澎湖島聯隊分会、平壌大同同志会、台湾軍新聯盟、佐賀県国防協会等全国各地の団体を始め個人としては限りなく何れも新手徹底的解決を望むとか、日本の正義を支那に示せといふ血書等勇ましいもので南から北から九千万国民の悉くから此度、三宅阪に集中されて軍の決断を鞭撻国ならしめてゐる、

在京中華人を警戒 血書も

【非常警備令下の…】

（東京十四日）北支事変の突発と共に帝都治安の総元締警視庁では速やかに在京支那大使館警戒在留中華人の保護等應急の處置はついたが、事変重大化を目して愈々非常警備令下の体制に這入つたが警視庁で最も重視してゐるのは支那各地に於ける邦人が不法圧迫暴行等を受けてゐる事実に関聯し市民の在留支那人に対する感情であるが、非常意識の燃え上つてゐるに拘らず市民は頗る冷静で何等敵愾心を以て危害を加へる様な憂は全くなく在留中華人の警戒保護共に比較的取締は泉観せられてゐる、尚在留支那人のうち学生は大半暑中休暇で帰国、殊に余も近く帰国する模様だが労働階級約二千は残留する筈である、

第一線部隊の慰問恤兵に 全國佛教聯合会起つ

●日露戦以来のこと…●

（東京十四日）支那兵を懲せと全国民の足並が揃つたとき今度は全国五十六宗派を網羅する芝区芝園橋佛教聯合会では第一線部隊の慰問並に恤兵に大々的に乗出す事になつた、全国に二十四万の会員を有する同会では今次事変が突発するやその重大性に鑑み本部では十一日迄に地方に関係首脳会議を開き、祖国難に赴いた同道の気概をその時局認識の徹底と挙国一致の精神振作の立場から第一線部隊の慰問恤兵等を協議、十二日全国五十支部、百に上る連絡団体に通牒を発したもので、全佛教会の動員は日露戦争以来のことで陸軍当局でも大いに感激してゐる、

全産聯も 積極的に政府を支持

（東京十四日）全国産業聯合会では十四日午後緊急常任委員会を開き藤原会長より北支事変に対する政府の決意につき詳細報告をなした後、左の決議を行ひ積極的に政府を支持する旨発表した、

北支事変に対し帝国政府のとれる東洋平和確保の措置は誠に機宜を得たるものと信ず、吾人産業経営の任に当る者は協力一致以て時艱の克服に邁進せん事を期す

十五日以降連日閣議開催

政府は時局の重大化に鑑み政府各機関の連絡を緊密ならしめる為十五日以降連日閣僚会議を開催することになつた、

支那民衆の抗日意識濃厚 政府に出兵抗敵督促 全國的一大民衆運動化の形勢

（南京十四日）南京市商会、農会、工会、女子青年会等諸団体は十六日午前八時より市党部に全市民中団体代表を召集、抗敵援護会を組織し第二十九軍全部隊を後援する事になつた、又新生活運動会以下民衆団体は頻々と前線部隊に激励電報を発し義損金の募集を開始し、ポスターと映画で民衆の抗日意識を喚起する事となつた、その他全国より中央に対し激越なる文句を並べた出兵抗敵督促の電報殺到し、党部の指導下に全国的一大民衆運動が捲き起されんとする形勢である、

北支事変に対する「ハル國務長官の態度を賞讃」

＝デイリー・ニユース紙の社説＝

（ニユーヨーク十四日）デイリー・ニユース紙は十四日の紙上で「ハル國務長官」と題する社説を掲げて曰く

「吾人は此度の事変に対する國務省の慎重な態度を賞讃したい、満洲事変当時のスチムソン前國務長官の態度が慎重を欠いてゐた事は人のよく記憶するところだ、其の当時スチムソン前國務長官及びフーバー前大統領は英仏の国際聯盟に於ける正義の叫びに應じて、開戰の危險に直面した程だ、此点ハル長官は今日までのところ上手にやつてゐるからワシントン駐在の日支両国代表者に極東に於ける戰争は世界の平和に害がある旨告げたが、別に戰争防止又は中止方法については何とも云はなかつた、イーデン英国外相は下院で米国と協議方を考慮中との旨を述べワシントンに聞くばせをしたが若しスチムソンであつたら喜んで之に應じたらう、然しハル長官には大して反應があつた様にも見えない、勿論吾人は世界の何處に於けると同様極東に於ても平和の為に協力するに吝かなものではないが、支那に於ける英仏の利益擁護の手先に今度はならない、英仏は勿論米国の友邦だが国際間の友宣には限度がある、スチムソン及びフーバーは其限度を知らなかつたがハル長官はこれを認識してゐるらしい、若しハル長官が此態度を堅持するならば多くの米国人に喜ばれるだらう、吾人は弱者支那に活極的同情は持つが米国が今外の戰争で積極的に支那側につく情勢は想像出来ぬ、翼くばスペインに於けると同様亜細亜に於ても冷静を失つてはならぬ、何れの戰争も吾人のビジネスではない」

秩父宮同妃両殿下
スイスに七月一杯御静養

（ロンドン十四日）秩父宮同妃両殿下には十四日午後四時半ヴイクトリア停車場御発、英国皇室の好意に依り宮廷列車でスイス、グリンデルワルトのインターラーケンに向はせられた、同地には七月一杯御静養の御予定と承はる、

大統領選挙期日
武市では九月五日施行

十四日午後フスト大統領は次期大統領選挙を武市内に於ては九月五日に施行する旨正式発表した、愈々当日市民は六十八名の大統領選挙人を選出する事にあつたわけだ、

バドルコ
飛行機製作所で
独乙式最新機を製作

バロマールの第一航空聯隊附属飛行機製作所では過般独乙より到着の最新式フオック・ウルフ機六台を十三日組立完了したが、フオック・ウルフ会社より許可もある事と

て愈々之をモデルとしてコルトバの飛行機製作所に於て精鋭な独乙式飛行機の製作を開始する事になつた、尚同日は亜国駐在各国陸海軍武官はバロマール飛行学校及び第一航空聯隊の設備を見学した、

亜国艦隊武港を抜錨

独立宣言祭祝賀のために武港に集結してゐた亜国海軍全艦隊は去る十三日各々平時の任務につくべくブエルト・ベルグラノに帰航する事となり巡洋艦ベインテ・シンコ・デ・マージョ号を先頭に各艦威風堂々武港を抜錨したが同日午後戰艦モレーノ号に於て海軍長官逢の午餐会開催、フスト大統領も臨席して伸び行く亜国海軍のために乾杯して散会した

愛國飛行機を献納し
銃後の国民としての任務を果す
東京市小学校長会議で決議

（東京十五日）全市小学校長会各区代表者三十五名は十五日午前教育局会議室に参集、片岡庶務、小松視学両部長列席の上時局に対して教育者及び六十万児童として如何ふる方法に依り銃後の国民としての任務を果すかに付協議の結果、満場一致で愛国飛行機を東京市教育団の名を以て献納し、併せて六百万市民に時局認識の徹底を期することにつた、その実施方法次の通り

一、来る十六日から五日間、八月一日から五日間を愛国紀念日とする

二、愛国紀念日には児童一日一人当り一銭以上五銭以下、官公私立中等学校生徒は一日一人当り五銭以上十銭以下を夫々節約す

三、教育局及び学校職員は一人当り一日十銭以上五十銭以下を節約して献金す

全國三百万の郷軍に対し
郷軍会長、重大訓辞を発す

（東京十五日）帝国在郷軍人会長井上大将は時局の重大性に鑑み十五日全国三百万の郷軍に対し重大訓辞を発し、全会員が国防第二線としての準備を完了有事の際直ちに国策遂行の第一段に驀進せんことを要望した、

ACADEMIA DE BAILES
SARITA
CANGALLO 1279
ゲヤズ タンゴ 二組のオルケスタ新設
ダンサー多数補充、面目一新！
毎日午前九時から午後十二時平迄教授
回数券十回分練習用一ペソ、初歩用二ペソ
但し日本人の方に限り割引
タップ・ダンスも教授致します
PROFESORA SARA MUÑOZ

なつかしい故國から
新刊書、雑誌沢山到着
各種雑誌、単行本、講談、小説類、児童物、其他
徒然なる夜長を楽しく読書でお過し下さい
日曜日は午前十時より店内を開放して居ります
藏田書店
市内カセロス街一九八三
ビエ三三（ブエルテン）九八七二

あふりかまる　（廿二日入港 廿七日出帆）
もんてびでおまる　（廿日入港 廿七日出帆）

ラ・プラタ港沖で大汽船の衝突

サウザン・プリンス号船腹に大破損

十四日午後三時過、ラ・プラタ港近くのカナル・デル・インディオ第二十八浮標地点でモンテビデオ港から武港に向け航行中のホウルダー・ブラザース会社所有の紐育―武港航路船サウザン・プリンス号（一〇・九〇〇トン）の船腹へ、同日午前ラ・プラタ出帆のこれス同会社所属船ゴロンドリーナ号（六〇〇〇トン）が衝突、サウザン・プリンス号は船室、機関室に浸水忽ち立往生、相当の破損を受けたが幸ひ沈没するに至らずかつて、エルスストリー・グレーンゲ号もバーブール間冷凍肉運輸船エルストリー・グレーンゲ号（六〇〇〇トン）が衝突、

船首其他に損傷を受けたが大した事はなく航海続行十五日修理の為め武港に入港した。前記二汽船衝突の急報に接した亜国海軍省はゴロンドリーナ号、ムツツーレ号、ホウケヤールド号を現地に急行せしめ救助に当らしめたが、人員に何等死傷なくゴロンドリーナ号は船客を十四日夜武市に運んだ。

サウザン・プリンス号今回の航海の積載貨物は機械類、自動車其他雑品四千屯、旅客は五十二名で衝突の原因は濃霧にあるとされてゐる。

運賃値上に関して

鉄道会社

政府の決意を促す

南部、西部、中央、太平洋等の鉄道会社は予てより一部鉄道運賃の値上を企図してゐたが、それが即急ある実施に関しては政府より「慎重考慮を要す、暫く様子を見極めて云々」の意向の披瀝あり結局だらく押しで今日に至ったが、去る十三日しびれを切らした前記鉄道会社代表はアルバラード土木相宛所謂「燃料の不足、少要材料の騰貴、経費膨脹等を挙げて鉄道運賃一部値上の不可避あるを説き、農産物高騰、国内景気好転を指摘し国内経済状態は鉄道運輸に対して料金値上を許容し得る状態にある事を強調、政府が鉄道会社の要求を容認せん事を陳情するに至った。

米洲歴史会議終る

米洲に於ける史実の調査、学術普及の具体策考究其他厂史文化の分野に於ける諸活動に関して、米洲諸国間に於て一致的行動乃至連絡を取らうとの意図の下に去る五日より武市「植民芸術博物館」において開催中の米洲厂史会議は、各国を代表する学者の厂史、文献、思想に関する有益な講演を最大の収穫として、去る十三日午後終会、次回は一九四一年チリー国サンチアゴ市に開催するに決定して散会したが、閉会式には カルカノ農相デ・ラ・トーレ法、アセベード蔵相も臨席した。

"先見の明ある英資の鉄道経営"

退亜の三鉄道技師

ロンドンに留学中本省の命令で南阿に赴き英資本下の鉱地に於ける鉄道を視察、後ブラジルに於けるる鉄道経営を視て遍歴リオ・デ・ジャネイロ丸で来亜、以来亜国に於ける英資の鉄道事業を視察中だった鉄道省技師島秀雄、下山定則、井上禎一の三氏は、去る十三日午前十一時半レティーロ駅発パシフィコ線で智利に向け退亜した。

出発に先立ち下山技師は次の如く語った。

「何分滞在期間が短かった為め亜国の鉄道としては僅かに南部線と中央線の二会社だけしか視察することが出来なかったので別に亜国鉄道の特徴と云った様なものを知る事が出来なかった。自分達の見学した会社は英国資本の会社だから英国製の汽関車とか客車をそのまゝ持って来てあるので何等欧洲のそれと変る所がないが、南部鉄道で使用してゐるデーゼル汽関車などは一寸見れないもので面白く見た。

紙兵が感心したことは久しい以前亜国が未開発の時代に英国が莫大な資本を入れて今日向ほ余剰ある施設をなしてゐる先見の明と、各鉄道会社が市の中央近くまで乗り込んで居り各駅間の連絡が地下鉄や何かでよく取れてゐる事等である。各会社の工場は未だ修繕位が関の山で製造工場は一つもない、滞在期間が短かった為め国営鉄道を見る事が出来なかったのは残念である。これからケリー、ペルーを経て北米に行き三ケ月程滞在して日本に帰るのは十二月末になる予定です」

右三技師は客車の設備の実を提供されて旅をしながら鉄路の視察が出来る様になってゐた。

学芸会

日会附属小学校では来る廿五日恒例の学芸会を開催の予定であるが、練習の都合で八月八日頃になるかも知れない由。

安着祝

森川与十郎氏宅では三男繁夫氏の日本より安着祝を本日夕親しい知友を招いて行ふ由。

菊地喜代治氏夫人

モレーノ駅在花卉栽培家菊地喜代治氏夫人は去る十四日午後十時頃急逝され、聖十五日午後ケヤカリータ墓地に埋葬の儀執行。

日会役員会

日会役員会は明十八日午後五時から同会館で開催、評議員会開催の件其他を協議の筈。

学芸会

日会附属小学校では来る廿五日恒例の学芸会を開催の予定であるが、練習の都合で八月八日頃になるかも知れない由。

（人事）

▲伊藤清蔵博士 十五日出武、約二週間滞在予定 ▲花田武官 十三日午前十時半鉄道省へ出発、約一ケ月滞在予定 ▲中塚秀夫氏（三井社員） 十五日鉄路ケリーへ赴任の途に出発 ▲伏見義雄氏 去る十六日退武 ▲中本勇氏 本十七日メンドーサに出発、十一月頃出武の予定 ▲豊島亨氏 本十七日メンドーサに向け退武

KEROFIX
DEL SR. ALEMAN (MARTIN)
M. SEITZ & Cia
EXPOSICION y VENTA　TALLERES
DEFENSA 321　CHACRAS 4511
U.T.33-Av-1529　U.T.91-9998
プランチャ機、カルデーラ用のケマドーレス・デ・ケセン製作販売、取付交換並修繕引受け。
当方はカーサ・ボルカン以来御馴染みのドイツ人で日本人諸彦間に数多の顧客を有し仕事は入念迅速、電話で御一報次第至急参上致し候
セイツ商会

チフス菌入り菓子を十四名に與へ三名殺す

さながら悪鬼！川口市の醫師

戦慄！醫師の"細菌殺人"

耳鼻咽喉科醫が繁昌する同業醫師一家の惨殺を目的にチフス培養菌混入の殺人菓子を贈り、更に同業醫方の看護婦・書生等にも与へたうへ、次には保險金詐取を目的に愛すべき自分の妻にまでこれを与へ遂には犯行の発覚を怖れこの妻を診察した内科醫一家の惨殺をもたくらんで細菌殺人菓子を贈り前後一年間にわたりチフス罹病患者十四名のうち三名を死亡させたといふ前代未聞の戦慄すべき近代科学利用の細菌殺人事件が発覚した、しかも当人はこれをすべて"研究のための犠牲"と昂然とうそぶいたといふ、細菌の喚ぶ獣奇的殺人魔か、同業義妬の外道におちた鬼畜の所為か、言語に絶した近代的殺人事件。

発覚の端緒

川口市本町四ノ一九八耳鼻咽喉科醫師高橋東三郎(三六)の妻横子(二八)さんは昨年十月十八日伊香保温泉で病気療養中、突然病勢が悪化し同月廿六日帰宅して同市本町二丁目三ノ一内科醫院柳田醫雄(五三)氏方に入院したところチフスと判明直に東京市本所区横綱町同院に入院したが、これより一ヶ月遅れて十一月末柳田醫院方で、柳田醫を除いて一家六名が俄然真性チフスに倒れ、柳田夫人よね(四四)さんは去る一月二日、三女たけ子(一五)さんは二月二日にそれぞれ死亡し、長女とも子(二一)さん四突然離縁状まで郵送して来たため大いに夫の態度を不審として結婚当時の仲人に過去の夫に対する疑惑の一切をブチまけ、こゝに川口署の活動となり去る五月八日高橋醫師を検挙して取調べたところ同月十九日にいたり遂に横子さん及び柳田醫院一家のチフス菌は高橋醫師によって菓子の中に混入贈られてゐたことが判明更にそれ以前の驚くべき細菌利用の科学的殺人事件の一切が暴露された。

高橋醫師は耳鼻咽喉科醫を同業してゐたがその異常な性格から営業繁昌のためには先づ同業者を追ひ拂ふより他に方法はないと恐るべき考へを抱き、まづ同じ町内の同業醫同市本町四ノ一五〇番田敬吉氏をめねて本職とは別に研究してゐたチフス菌利用によって殺害しようと考へ昨年二月十八日チフス培養菌混入のカステラの折箱を同家に贈った、同家ではこれを長女あや子(一八)さん長男英男(一六)君、次男章君(七)三男良宣君(五)の四人が喰べ、忽ちあや子さんと良宣君は同夜発熱して一週間床についた、しかし当時これはチフスとは診断されず、高橋の殺人計画は未遂に終ると、もに事件の発覚はまぬがれたが、そこで高橋は

今度は同じ同業醫同町四ノ五四小野忠信醫師一家の殺害を企て、先づ六月廿日、自家に遊びに来た同家の看護婦三上さだ(三一)さん生野上一(三六)女中大飼久(一八)の三名に細菌混入の栗饅頭を与へたところ、三名とも同夜のうちに発病して、遂に大飼さんは翌日死亡してしまった、この結果に自信を得た高橋は婦人病のため子供も居ない全然愛情を感じられない妻横子さんをこの細菌菓子で殺害して横子さんに掛けてある生命保険金六千円(内訳日本生命五千円、第一生命一千円)を詐取し、相場で大穴をあけてゐた経済困難しようと

同年十月十八日、当時伊香保温泉に婦人病手術の予後を保養してゐた横子さんを同じチフス菌混入の菓子折をたづさへて見舞ひこの菓子を喰べた横子さんは予期に反して快方に向ふしこれを診察した柳田醫師に底ぶかれたと思った高橋は自家の不況に引きかへて繁昌する柳田醫院への嫉妬を再燃して、犯跡を蔽ふべく十一月廿二日朝上野松坂屋で菓子ゝきみごろも一箱を買って同愛病院に行き妻を見舞ふ傍ら、同病院に依託保管してもらってゐたチフス培養菌をとりもどし、こっそりとその中に混入、何喰はぬ顔で同ビ松坂屋に引返し同店の配達係を通じてこの細菌入りの菓子折を柳田醫院へ妻の診察に対する礼状とともに屈けさせた翌廿三日何も知らぬ柳田醫院方ではこれを喰べたまち一家六名の腐病となったもので柳田醫師はこれを単に飽中毒として看過するに忍びず内務省衛生局及び市醫師会の應援下に原因探究に進み遂にチフス菌を発見、二月末高橋を川口署に訪へ出てゐたものである

高橋醫師は埼玉縣北埼玉郡中條村一〇三八竜太郎氏の弟で昭和三年三月千葉醫大を卒業したがかって赤のシンパだったとも云はれ相当の悪者があったにも拘らず年十二円の醫師会々費も支拂はない程金銭に執着の強い男であった

日本食料品
沢山新着
中川商店
市内スアーレス街 一三〇〇
U.T. 二一一〇八六九

ALMACEN
NISHISAKA
醤油 味噌
沢庵 音物
製造販売
日本食料品輸入販売
亀甲万一樽 十六ペソ
値段勉強 配達迅速
西坂貫太商店
市内アウストラリア街 一一〇二
U.T. 二三(バラカス)二九一五

御旅館
御下宿
和食
洋食
双葉
に應じます
尾崎幸千代
ウスパジヤタ街 八二
U.T. 二三(ブエノ・ルデン)五七三五

Año XII N.º 704

"EL ARGENTIN DJIJO"

Correo Argentino
Tarifa Reducida
Concesión 718

Buenos Aires, sábado 17 de Julio de 1937 — SECCION CASTELLANA — Dirección: USPALLATA 981, U. T. 23 - 7051

Las nubes de guerra que agitan al extremo oriente

No bien calmados los rumores acerca del incidente ruso - japonés del río Amur, al cual no faltó quien le atribuyera importancia que realmente no tiene ni puede tener, dado el carácter del suceso, y que terminó diplomáticamente como no podía ser de otro modo, volvió a cubrirse el cielo del Extremo Oriente con negras nubes que parece amenazar la paz de esa región oriental.

El suceso de Wang-Ping-Hsien, cerca de Peiping, en donde los soldados chinos atacaron con malévola cobardía a las tropas japonesas de guarnición en la China del Norte, mientras éstas se hallaban entregadas en acción de maniobras. Repelidos los primeros, pretenden ahora, como lo han hecho siempre, que ellos son las víctimas y claman por la simpatía del mundo. Los ejércitos chinos de ahora, sin excepción, o son bandidos o están conminados por el espíritu del bandolerismo, desde los mariscales hasta el último soldado. No se les puede fiar para nada, ni son leales entre ellos mismos. Sin duda, los jefes del ejército chino son aliados del soviet, según denuncia una información de la agencia Domei que dice que los soviets han prometido ayudar a los chinos para que ataquen a los japoneses. La sucesión de los acontecimientos del río Amur y de Wang-Ping-Hsien lo confirma claramente. Y la actitud del gobierno de Nankin, ahora como siempre, aparentemente indolente, con hipocrecía sin nombre, observa la marcha del suceso, para intervenir cuando le conviene o para eludir su responsabilidad si le resulta desventajosa.

Es necesario saber, ante todo, que el Japón tiene el derecho de movilizar sus tropas en maniobras en esa región de la China, como lo tienen otras potencias que intervinieron en la cuestión de Boxers.

Los que siguen con atención las informaciones del Oriente recordarán que no ha mucho hicieron lo propio los soldados de la guarnición de Italia y de Gran Bretaña. Son tropas que permanecen allí y necesitan ser adiestrados y el tratado del año 1901 les confiere ese derecho. La culpa de obligar a las potencias mantener la guarnición es de los mismos chinos que no pueden ofrecerles ninguna seguridad para los residentes extranjeros. Allí han estado y están siempre en peligro la vida y la propiedad. Por eso están los soldados de diferentes países para proteger los intereses y derechos de sus connacionales.

Además es menester saber qué es el Norte Chino, cuáles sus relaciones con el gobierno central de Nankin. Las provincias del norte de China son semi-independientes, tributarios al gobierno chino de Nankin, que continúa en un estado anormal. Las autoridades de Nankin no tienen suficiente control sobre los caudillos que gobiernan esas provincias, ni éstos para independizarse completamente del primero, lo que produce tiranttez entre ambos, dificultando la unión, a pesar de los buenos oficios del Japón.

El Japón no desea otra cosa que la paz y la tranquilidad en China, por su propio bienestar y por su vecino por cuyo progreso anhela, ya que el verdadero adelanto del oriente no se puede realizar sin antes asegurar la paz de todos. China lo sabe, aunque los caudillos que se mueven por su interés individual pretenden ignorar la verdad. El movimiento anti-japonés, tan descaradamente propagado en China, tiene, además, manos ocultas que lo apoyan.

Bien curioso lo que está pasando en China. Cada vez que Japón consigue atraer a China para estrechar las relaciones de amistad, acontece algo que los separa de nuevo. Ultimamente, China parecía encaminada a seguir los consejos del Japón, en tanto que en algunos círculos se habla de la inclinación de Gran Bretaña de buscar la antigua amistad de su ex-aliada, el Japón, producen, de repente, el incidente del río Amur y del Norte Chino. Diríase que el mundo perverso trata de no dejar en paz al Japón que tanto lucha por ella. Pero el Japón, que sabe soportar las calamidades de la naturaleza, también sabrá salir airoso en su lucha contra los enemigos presuntos o invisibles, porque la fuerza de la justicia le acompaña y lo alienta hacia el triunfo y la gloria.

El aspecto que pintan las informaciones llegadas hasta ahora (día lunes 12) desde Tokio, el asunto no deja de intrigarme, puede provocar graves sucesos todavía. Pero, calculando por la psicología de los chinos, la situación real del Japón en esa región, y atento también a las actitudes de otras potencias interesadas en China, creo no equivocarme en asegurar que el gobierno de Nankin escuchará una vez más, con sinceridad o no, las indicaciones japonesas que serán en bien suyo, y presentará las excusas y satisfará las demandas del gobierno del Japón para reparar el mal que ha hecho.

Y, en cuanto al porvenir del norte chino, todo dependerá de la actitud de parte de Nankin, pues el Japón vigilará con mayor celo en el futuro para mantener la tranquilidad de esa región cuyo disturbio es perjudicial para el desarrollo pacífico de Manchkuo.

Es realmente sorprendente la ignorancia que predomina con respecto a la política japonesa entre los escritores de este país. No ha muchos días he leído en un diario que se supone que simpatiza con el Japón, cosas increíbles: "Rusia es pacífica, decía, y que el Japón se muestra cada vez más imperialista! El gobierno de Moscú es pacifista, porque así habla! ¿Sería pacifista el Japón, yendo hacia la región de los Urales, con armamentos que puede amenazar a Rusia y toda la Europa, si sólo proclama la paz?

Hay que ver lo que hace una potencia, y no lo que puede decir. Rusia amenaza la paz del mundo, el oriente está en un peligro inminente de caer en sus garras del comunismo, para retroceder en vez de adelantar, cosas que el Japón quiere evitar para sí y para todos los orientales.

La caótica China está semi sovietizada en el norte y en el oeste y en la parte sur y centro, la población vive envenenada por el opio. Hay que abrirles los ojos a los chinos para que reaccionen. Felizmente no está muerta aún. Japón tiene la esperanza de recapacitar a la antigua nación que un día fuera su maestra.

Es digna de llamar la atención la actitud observada por el gobierno del Japón en esta emergencia. Ante la acción barbárica y la infamia del gobierno y pueblo de China, el gobierno del Japón, que no pierde la serenidad y aspira por la paz y el reino de la justicia, a pesar de verse obligado a tomar las medidas de armas para su propia defensa, no olvida instruir al pueblo para que no haga nada que desmienta la rectitud y nobleza del alma japonesa. Mientras que los chinos saquean las propiedades y matan a los residentes japoneses en su país, el Japón procura proteger a los residentes chinos en el Imperio!

G. Yoshio Shinya.

Influencias occidentales en la historia y en la cultura del Japón.

POR EL Dr. IZURU SHINMURA, PROFESOR DE LA UNIVERSIDAD DE TOKIO

(Continuación).

Habiedo llegado al Japón, uno tras otros, numerosos y muy hábiles misioneros, pronto lograron numerosas conversiones, tanto entre la clase de los samurais (Miembros de la clase militar de la época feudal en el Japón), como entre el común del pueblo, especialmente en los distritos de Kyushu y Kinki. Se construyeron iglesias y hacia 1580,—tan sólo treinta años después de la llegada del fraile Francisco Javier—, ya se habían establecido colegios y seminarios en las grandes ciudades cristianizadas, tanto en las costas del Este como en las del Oeste de Kyhusu. El ejemplo fué inmediatamente secundado en Kyoto, Osaka y otras ciudades de más reciente formación. La época de florecimiento de esas instituciones en el distrito de Kinki, fué muy corta. En las nuevas ciudades cristianas del Oeste de Kihusu, tales como Arima, después Amakusa y finalmente Nagasaki, esos establecimientos educacionales duraron unos treinta años, aunque en ocasiones cambiaron de locales. Después de 1390 diversos libros útiles fueron impresos en tipos movibles en las imprentas de reciente establecimiento. En las escuelas se enseñaban no solamente lenguas como el japonés, el latín y el portugués, al lado de las materias correlativas a la educación religiosa, sino que también se impartían cursos elementales de ciencias y artes occidentales, tales como lecturas de los clásicos, filosofía elemental y ciencias. Se imprimieron fragmentos de los clásicos; se tradujeron al japonés narraciones morales, entre ellas las fábulas de Esopo; uno de los más conocidos cuentos históricos del Japón medioeval, fué vertido al japonés moderno y sencillo, en letras romanas; otro se imprimió en su forma original como libro de lectura.

(Continuará en el próximo núm.)

VIAJE DEL AGREGADO NAVAL

Partió a Santiago de Chile, el agregado naval a la legación del Japón, capitán Hanada, en cumplimiento de su misión en la República vecina.

SINTONICE EL PROGRAMA DE LA
Osaka Shosen Kaisha
todos los miércoles a las 19 horas.
POR RADIO EXCELSIOR

LAMPARAS "YAMADA" DE CALIDAD

Luz Clara - Terminación Prolija - Selección Especial
USE LAMPARA "YAMADA"
En venta en las buenas casas del ramo

!Beba buen café!
EL CAFE DE SANTOS "AGUILA" está elaborado con los mejores cafés que se importan del Brasil, tostados y con un 10 o|o de azúcar abrillantado. ¡Nada más!
Muchos cafés que por ahí se expenden, ¿podrían afirmar otro tanto?
Deduzca Vd. y prefiera el
CAFE DE SANTOS "AGUILA"
ES UN PRODUCTO SAINT.

EXTRAORDINARIO AUMENTO DEL COMERCIO EXTERIOR

Tokio, Julio 10.—El comercio exterior del Japón que, desde los primeros meses del año denotó un aumento notable, ha pasado de los 4.000 millones de yens en la primera semana de Julio, vale decir, en los primeros seis meses del año, y el exceso de importación sobre la exportación que también aumentó más del doble del año anterior, alcanzó a 683 millones.

DIFUSIONES CULTURALES DE L. R. A. RADIO DEL ESTADO

L. R. A. Radio del Estado, de reciente creación, que ha planeado un programa de acción cultural, ha ofrecido dos transmisiones semanales de 15 minutos cada una al Museo Social Argentino. Las autoridades del Museo Social, han resuelto, por su parte, brindarlas por igual a todas las secciones de que se compone la citada Institución.

De suerte que le tocará al Instituto Cultural Argentino - Japonés aprovechar su uso dos veces por mes o más. Invitado a iniciar la propaganda cultural de la sección, el jueves 15 del corriente habló en nombre de la entidad el Dr. Albino Pugnalin, quien disertó sobre la organización y tareas a que se halla entregada la entidad mencionada fundada por iniciativa del almirante M. Domecq García y el señor G. Yoshio Shinya en 1933.

El agente de la Kokucai Bunka Shinkokai ha ofrecido a las autoridades de la Radio del Estado el uso de discos japoneses para difundir las músicas y cantos del Japón.

CONFERENCIA DEL SEÑOR HOSOKAWA

El secretario de la legación del Japón, señor S. Hosokawa, especialmente invitado por la Escuela Japonesa anexa a la Asociación Japonesa en la Argentina, el domingo último, en el salón de actos de la sociedad mencionada, pronunció una interesante como instructiva conferencia relacionada a la educación de los niños.

EXPOSICION DE CLAVELES

Se realizó por primera vez en la Asociación Japonesa la exposición de claveles organizada por la Asociación de Horticultores Japoneses de esta capital.

La feria, que tuvo lugar en los días 8 y 9 del corriente, congregó numeroso público al local de la Asociación mencionada, llamando la atención entre los entendidos, las producciones magníficas allí expuestas.

Fueron distribuidos varios premios, por categorías y por puntos, correspondiendo los primeros a los señores S. Takaichi, A. Araki, M. Tateno, Y. Kono, R. Suzuki y M. Furuken. Por puntos: señores S. Takaichi, (410); K. Sasaki, (377); H. Ogasawara, (233), e I. Aizawa, (232).

Por la mejor flor expuesta recibió la Copa del Encargado de Negocios del Japón, el expositor señor R. Suzuki. El premio del "Argentin Djijo" correspondió al señor Furuken. El señor Takaichi tuvo cuatro premios.

NEGOCIACIONES ECONOMICAS ANGLO - JAPONESAS

Londres, julio 9.—Los delegados económicos del Japón continúan negociando con los delegados económicos de Inglaterra sobre la posibilidad de concertar un tratado económico amplio que les permitan a las dos naciones desarrollarse cómodamente y de común acuerdo.

Hasta ahora han convenido que, para el mutuo beneficio, es útil fomentar el desarrollo del organismo central de federación de economía nacional en ambos países, los cuales podrán ponerse en contacto uno con el otro para coordinar sus esfuerzos en pro del benegficio general.

Declararon por ambas partes que es deseable que los dos países marchen de acuerdo en su expansión económica, ya que existe un vasto campo de acción en el Oriente para ambos.

SOBRE LA NUEVA CONFERENCIA MUNDIAL

Háblase de la probabilidad de concertarse una nueva conferencia mundial a proposición del presidente Roosevelt, con ambiente propicio en Europa, y que al realizarse se tratarían de los siguientes asuntos: Cuestiones de la moneda, los aranceles, los créditos y la reducción de los gastos de armamentos; cuestiones del intercambio y las deudas de guerra entre los Estados Unidos y las naciones de Europa; y sometería a una conferencia mundial cuestiones financieras y del comercio internacional.

"NAMBEI"
Compañía de Importación y Exportación Sociedad Anónima
Telegramas "NAMBEI"
U. T. (33) 3001, 3002, 3003, 3004, 3008 y 3571
T. T. Buenos Aires, 904
SARMIENTO 470 . BUENOS AIRES

K. ANNO
The National City Bank of New York
BARTOLOME MITRE 502
U. T. Avenida 33 - 4031

H. KATO
Unica Fábrica Japonesa de Tejidos de Sedas y Gran Instalación de Tintorería
HERRERA 2097 y 2111 - U. T. 21-1841

SADAO HATTORI
IMPORTADOR
Especialidad en artículos de Cepillería
LINIERS 640 - U. T. 45, Loria 3219

KATSUDA y Cía.
Importadores
MEXICO 1474 - U. T. 38, Mayo 2813

B. TAKINAMI
Importador
Casa Establecida en el año 1905
VICTORIA 783 - U. T. Mayo 38-3413

I. HIROTA
Importador de artículos generales del Japón
CHILE 1089 - U. T. 37 (Riv.) 1051

A. HANAFUSA
Representante de
Mitsubishi Shoji Kaisha, Ltda.
FLORIDA 229 U. T. 33-5469

S. YAMADA y Cía.
Importadores
MORENO 2039
U. T. Cuyo, 47-4354 y 4405

IIDA y Cía. Ltda.
(Takashimaya)
Importadores y Exportadores
RODRIGUEZ PEÑA 162
U. T. Mayo 38-3419

R. HARA y Cía.
Importadores
BELGRANO 1470
U. T. Mayo 38-2438 y 9437

CARLOS C. ISHIY
Importador y Exportador
Bmé. MITRE 341 - U. T. 33 Avda. 9782

S. YOKOBORI
Representante de FUJISAKI y Cía.
CANGALLO 499
3er. Piso Escr. N.o 21-22 - U. T. 33-9390

TARO MURAI
Unica Casa Introductora de
Porcelana "NORITAKE"
MAIPU 463 - U. T. Retiro 31-3189

F. KANEMATSU y Cía. Ltda.
Importaciones y Exportaciones
JUJUY 136 - U. T. 45, Loria 5823 y 5824

PIDA SIEMPRE
Marca KANEBO
PARA TEJIDOS
Avda. ROQUE SAENZ PEÑA 989
U. T. 35-7632 8.o piso Oficina D

M. OMURA
Importador de artículos generales del Japón
SAN MARTIN 235 - U. T. 33-2683

S. ANDO y Cía.
Importadores
DEFENSA 532-40
U. T. 33 (Av.) 2296

JIRO HONDA y Hno.
Importadores de Artículos Generales del Japón
MORENO 1320 - U. T. 38 Mayo 2718

Casa "YAMANAKA"
Oriental Fine Art Curious
VIAMONTE 624 - U. T. 31 7846

K. YASUNAGA
Compañía Argentina, Comercial e Industrial de Pesquería
DEFENSA 1597 - U. T. 38-7769

S. TSUJI
Importador
BALCARCE 682 - U. T. 33 Avda. 5744

LA MAISON SATUMA
K. YOKOHAMA
Objetos de Arte y Antigüedades
ESMERALDA 1080 - U. T. 31-8601
Sucursal:
SUIPACHA 865 - U. T. 31-4837

Sastrería JAPONESA
Fundada en el año 1916
de S. KATAYAMA
PIEDRAS 572 - U. T. 33-5452

GUIA JAPONESA

LEGACION DEL JAPON: Reconquista 336. — U. T. 31-3193.

CONSULADO DEL JAPON:: Reconquista 336. U. T. 31-3193.

CAMARA DE COMERCIO JAPONESA: Avenida Roque Sáenz Peña 618. — U. T. 33-1452.

INSTITUTO CULTURAL ARGENTINO-JAPONES: Viamonte 1435.

ASOCIACION JAPONESA: Patagones 840. — U. T. 23-4893.

COMPAÑIA DE VAPORES O. S. K.: ROQUE S. PEÑA 616 - 2.o Piso
U. T. 33-1051 - 1052 - 1053 y 3566